

文化財学習会

# ふるさと探訪

テーマ 多度津陣屋の史跡をたどり資料館に学ぶ

講師 川元紀恵

(多度津町立資料館館長)

平成20年9月28日(日)

共催 高松市歴史民俗協会

高松市教育委員会

# 1 多度津町

多度津町は仲多度郡の最北部にあたり、東は丸亀市、西は三豊市宅間町・南は善通寺市に接しています。元禄七年（1694年）丸亀京極藩から分封（一万石）された京極高通（たかみち）の後、四代高賢（たかかた）がこの地に陣屋を設けてより城下町として栄えました。

明治二十三年（1890年）町村制施行にあたり、多度津町と称しました。

その後、町勢の発展に伴い、昭和十七年（1942年）豊原村と合併、昭和二十九年（1954年）四箇・白方の両村と合併、さらに高見・佐柳島の両村を統合し、現在に至っています。

## 現在の多度津町概要

総人口 二万三千七百二十二 人（男 一万千六百七十人・女 一万二千五十二人）

世帯数 九千二百二十八 世帯

位地 北緯三十四度十六分 東経百三十三度四十五分

町花・町木 桜

町章 多度津の「タ」を図案化し、これを熨斗結びに見せて町の発展と団結のシン

ボルとしたもの。旧多度津藩主京極家家紋の菱四つ目に似通わせたものです。

## 2 多度津町立資料館

多度津町立資料館は、JR多度津駅から北西へ徒歩十分の地にあります。

旧多度津藩士浅見家から敷地・工芸品の一部が寄贈され、町制施行百周年を記念して平成二年（1990年）に開館しました。

この資料館は多度津にゆかりのある文化財

を収集して一般に公開し、後世に残すことを目的としています。

江戸時代から明治・大正・昭和にかけて使用された大名道具や民具など、一部には考古品も含む多くの貴重な資料を収蔵しています。

一階にある江戸時代に海運の主役であった弁財（べざい）船の模型（宝暦五年（1755年））に高見八幡宮へ奉納は奉納年代の確認されているものでは、全国でも最古級のものです。塩飽諸島の船大工たちの、優れた造船技術を伝える模型として、高い資料価値を有するものです。



多度津町立資料館

また、多度津藩陣屋（家中）模型は、多度津藩京極氏が居住する居館（御殿・新御殿）や調練場・藩米庫・作事場・家中と呼ばれる土屋敷を配し、砂洲上に築かれた陣屋が見事に再現されています。

このほか、多度津藩藩札の版木、京極家家紋入りの提重など見るべき資料が多く展示されています。

塀や玄関先の庭園は武家屋敷の面影が残されており、斜め向かいには東御殿と呼ばれた家老林家の屋敷があり、家中屋敷の中で最も昔の面影をとどめた一角となっています。



多度津町立資料館 玄関



多度津町立資料館 前庭

### 3 陣屋跡

多度津京極藩の創設は元禄七年（1694年）丸亀京極藩主京極高豊（たかとよ）の子、高通（たかみち）が初代藩主となりました。以後高慶（たかよし）・高文（たかぶみ）・高賢（たかかた）・高琢（たかてる）・高典（たかまさ）と明治維新まで百七十六年間続きます。

城の築造を許されない大名の屋敷を陣屋と呼び、天守閣や大規模な櫓・堀・城壁を持つことができませんでした。

多度津陣屋は文政九年（1826年）四代藩主高賢（たかかた）の時に、家老林直記を責任者として構築工事にかかり、同十年に完成しました。敷地は、三方（北・南・西）を防御するため、海と桜川に囲まれた砂洲に造られ、およそ六千六百坪を占めていました。また、蓮堀（はすぼり）という堀を人工的に掘削し、東の防御としていました。陣屋は明治維新直後に取り壊され、跡地にJR多度津工場が立地するなど現在その痕跡は残っていませんが、蓮堀跡を示す石柱が立てられています。



多度津陣屋 蓮堀跡

## 4 武家屋敷

多度津町立資料館から四百メートルほど東に入った家中（かちゅう）と呼ばれる場所は、多度津京極藩一万石の武家屋敷があった地域です。第二次世界大戦の空襲を受けていないため古い町並みが残り、袋小路や鉤の手になった街路が侍町独特の雰囲気を醸しています。現在も富井家（国登録文化財）が往時の様子をそのまま残しています。ほかにも古い門構がある家など武家屋敷の名残をとどめる家・屋敷を見ることができます。

富井家に代々伝来した文書（藩主の江戸行の随行道中記など）は香川県立文書館に收藏されています。

また、富井家の向側には御厩跡が残されています。



武家屋敷 富井家



御 厩 跡



御厩跡 石柱

## 5 多度津藩お船溜り跡

多度津の町には桜川が流れています。川は豊津橋から極楽橋にかけて大きく湾曲し、海へと流れています。桜川の河口は船溜りとして利用されてきました。

金毘羅参詣船や北前船、大小数々の船が停泊し、瀬戸内海航路で運ばれた積荷の上げ下ろしで、活気を呈していたようです。川沿い（仲ノ町）にはえびす神社や商家の蔵が残されています。

藩米蔵もこの船溜りの近くに設けられていました。



多度津藩お船溜り跡

## 6 雁木（がんぎ）

船溜りから陸地へ荷物の上げ下ろしをする際に、利用されたのが雁木（がんぎ）と呼ばれる石組みです。潮の干満・川面の高低など水面の変化に対応して荷物の積み下ろしができるため、近代以前には多く見られましたが、現在は浮き桟橋が設けられるなどして、雁木が設置されることは少なくなっています。



雁木（がんぎ）

## 7 四国鉄道発祥の地

多度津を起点として丸亀・琴平に至る「讃岐鉄道株式会社」を設立したのは、回船問屋大隅屋五代目景山甚右衛門ほか十七名の人たちでした。

明治十八年（1885年）に三城みきやしち弥七（多度津く神戸間の定期航路船主）を社長に景山を副社長に企業目録見書が次のように出されました。

一 本社は那珂郡丸亀町百三番地

一 経路は丸亀町を起点に中府・津森・今津・下金倉・下鴨・道福寺・多度津・庄・葛原・金蔵寺・稲木・上吉田・生野・大麻・琴平村のルート

一 資本金二十五万円。株数二千五百株

この申請により、明治二十年（1887年）仮免許、二十一年（1888年）に本免許が下りました。

明治二十二年（1889年）五月二十三日に丸亀く多度津間十五・五キロメートルに一番列車が走り、四国では伊予鉄道に次いで二番目の開業となりました。

処女列車には多度津小学校の児童二十人が招かれましたが、乗り方がわからず、下駄を脱いだり、窓から入ったり大変だった、という話が伝わっています。

開通当時、駅舎は今の町民会館の場所にあり、丸亀く多度津間の運賃は上・中・下の三

ランクに分かれ、グリーン車に相当する上等は九銭、中等六銭、下等は三銭でした。明治三十五年（1902年）には食堂車を連結し、女性接客員（女ボーイ）が乗務していました。袴を着けた女ボーイは大いに受けたそうです。

その後、明治三十七年（1904年）に山陽鉄道に買収され、明治三十九年（1906年）には鉄道国有法により国有化されたため、わずか十五年しか営業はされませんでした。が、四国の鉄道網は讃岐鉄道が根幹となって発展したものです。



多度津町民会館（讃岐鉄道駅舎跡）



志賀直哉の「暗夜航路」には多度津港と讚岐鉄道多度津駅の様子が書かれた一節がありま  
す。

ぼうぼうと耳の底へいやに響く汽笛を頻りにならしながら船は屋根の澤山見える多度津へ  
向かつて進んでゐた。~~~~~多度津の波止場には波が打ちつけて居た。  
波止場の中には達磨船、千石船といふやうな荷物船が澤山入つて居た。

謙作は誰よりも先に棧橋へ下りた。横から烈しく吹きつける風の中を彼は急ぎ足に歩いて行  
つた。丁度汐が引いてゐて、浮き棧橋から波止場へ渡るかけ橋が急な坂になつてゐた。それを  
登つていくと、上から、その船に乗る団体の婆さん達が日和下駄を手に下げ、裸足で下りて来  
た。謙作より三四間後を先刻の商人風の男が、これも他の客から一人離れて謙作を追つて急い  
で来た。謙作は露骨に追ひつかれないやうにぐんぐん歩いた。何處が停車場か分らなかつたが、  
訊いてゐると其男に追ひつかれさうなので、彼はいい加減に賑やかな町の方へ急いだ。

もう其男もついて来なかつた。郵便局の前を通る時、局員の一人が暇さうな顔をして窓から  
首を出してゐた。それに訊いて、直ぐ近い停車場へ行った。

停車場の待合室ではストーヴに火がよく燃えてゐた。其処に二十分程待つと、普通より少し  
小さい汽車が着いた。彼はそれに乗つて金刀比羅へ向かつた。

\*送りがな・読み方は昭和60年印刷の秀選名著復刻全集 暗夜航路のまま掲載しています。

## 8 多度津港

多度津港の繁栄に伴い、桜川河口の港が手狭になってきたため、問屋衆たちの間から新湛浦（たんぼく築港）築造の要望が起こって来ました。

多度津藩五代藩主高琢（たかてる）は天保五年（1834年）から五年間の歳月と巨費を費やし新湛浦の大工事に取り組みます。

工事総支配に藩家老の河口久右衛門を起用し、東方突堤長さ百十九間、北より折れて西に向かう西突堤七十四間を東北に延長、中央で別に百二十間の防波堤を設けました。その両端二所に港門があり、堤上幅各々三間半港内方百六間。この費用およそ金六千二百余両といわれ、天保九年（1838年）に完成。内海屈指の良港となりました。

新湛浦完成後は大型の廻船（北前舟）も入港できるようになり、半年間で千数百艘の入港があったと伝えられています。廻船問屋をはじめ諸国の物産を扱う「よろず問屋」が港周辺に七十余軒も軒を連ねていたそうです。

今も北側護岸は、当時築かれた石積が残っています。

明治三十七年（1904年）日露戦争が勃発しました。陸軍第十一師団（師団長は乃木希典大将）にも命令が下り、多くの兵士が旅順攻撃軍に加わります。多度津港はこの出征・帰還に利用されました。

「一太郎やあい」の話はこの時の逸話です。

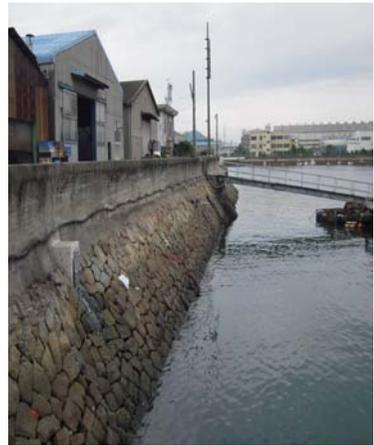
## 9 多度津の町並

江戸時代の武家屋敷・国登録文化財の山本医院

(昭和初期)・山本医院の向側に建つ木谷歯科医院(元楽天堂医院 大正初期)・仲ノ町桜川沿いに少林寺の旧道場(日本少林寺拳法発祥の地)など、多度津の町には古い建物が多く残っています。



木谷 歯科医院



天保年間に築かれた石積



山本医院 (国指定文化財)



合田酒店



旧少林寺拳法道場



民家



民家

【参考文献】

『多度津町史』多度津町 昭和三十八年五月三十一日発行

『藩政にみる讃岐に近世』 (株)美巧社 二〇〇七年四月六日発行

『讃岐人物風景 5・8・11・12』丸山学芸図書(株) 昭和五十六年9月三十日発行

『秀選 名著復刻全集 近代文学館 志賀直哉著 暗夜航路』

(株)ほるぷ 一九八五年十一月一日発行

『多度津町立資料館リーフレット』

『多度津今昔物語』 多度津町産業課

